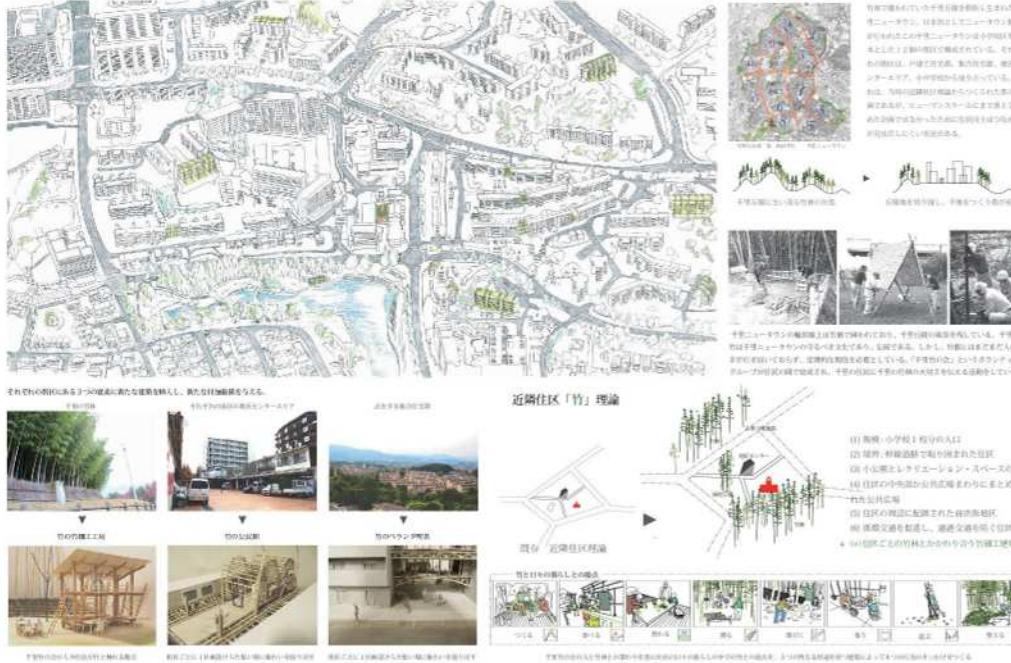


竹紡ぐ千里の後世

～変わらぬ街並と変わらぬ竹景の在處～



三つの竹細工建築

に前に引かれたそれぞれの形態に、背筋の運営をもつて、100の筋膜を構成する。2つの筋膜を小筋膜の筋膜と呼んであるが、これは筋膜を2層に分ける筋膜である。筋膜は筋肉を保護する役割を有するが、筋膜は少く、筋肉は多く、筋肉は少く、筋膜は多くである。筋膜は筋肉の表面を覆う筋膜である。



卒業設計のタイトルと概要

竹紡ぐ千里の後世 – 変わりゆく街並みと変わらない竹景の在処 –

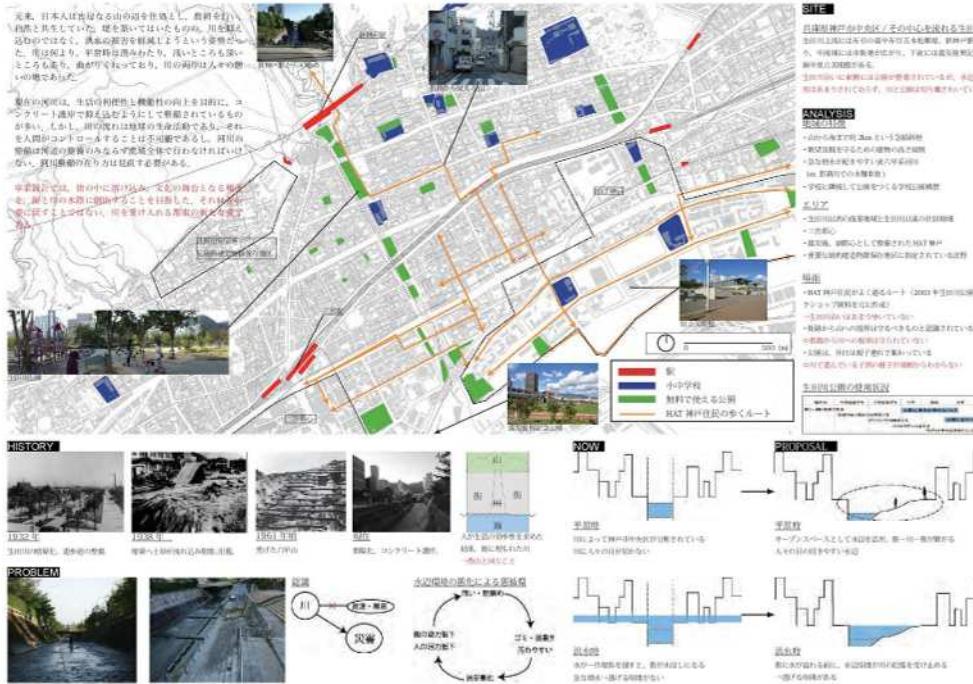
これは、竹細工という小さなものづくりから始まる町づくりの物語である。竹林で覆われていた千里丘陵を開拓し生まれた千里ニュータウン。建設当初は「東洋一の理想都市」といわれ、建設という未来への暮らしに祝祭した町であった。現在は、ニュータウン開発から50年が経ち、町のあちこちで再開発が行われている。しかし、その行為は祝祭という言葉からはあまりにも離れており、未来への活力を見出すことができない。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

研究旅行テーマ「スペインにおける土地固有の素材と建築空間/素材と空間が織りなす都内の風景」

訪問予定の外国の都市・街並・建築物の内容

スペイン/サラマンカ、レオン、バジャドリッド、バルセロナ：私はその土地固有にしか持てない個性が都市の風景をつくり、その個性が住民の日々の生活に介入してくる状況に興味があります。土地と素材との関係を研究するために絶好の場所だと考え、「素材と空間が織りなす都市の風景」という研究テーマで、建築における素材の使われ方や空間構成、そして周辺環境との関係性を実測、スケッチによる記述を通して分析することを目指します。



研究旅行のテーマ： 水のある街・水のない街

・本節設計の特徴点

私は市営競技で神戸市中央区を走っている生田川に着目しました。この規則に着目した理由は、日本に数多存在する都市河川の中でも、この規則は市民的に公園という公共の土地が残っており、水辺を活用できる可能性が残っていると感じたからです。

そもそも日本国民の心が出来ておらず、それは、私の経験から1年・2年という間に出来たものである事に起因しています。子どもの頃は都会が好きではありませんでした。私たとてもそれは、つながりなく寂しく地獄でした。そもそも、山田洋次監督、森田一義監督の映画で外見から学んで到了ばる日本人のDNAには、自然と内側に「理屈的」空虚な性格があるはずです。それに加えて、「私は何時何分会社を辞めてもいい」と心が揺らないうからです。この考えは多くの日本人に通じるのではないか。革命で死んで倒している間にこそ生き残れる命が何よりも大切なことを考えました。日本の人は、海外で暮していながら自分の風呂場を掃除することを忘れてしまっていた。それが、日本の伝統文化が死んでしまっている。今の日本の健全性はその心が死んでいるのではないか。その問題意識が私の卒業論文の原因になっていた。

・地図の特徴

そこで私は渠成設計を廻して、都市の中に豊かな水辺空間。平野時はより使いやすく、洪水時はより豪華で美しい水辺空間、雨の資源として人々に認識され愛着を持たれる水辺空間を創造することを目指しました。

• 160 of 221

研究会では、土と水上に付着している細胞の細胞について講演することになり、日本においては既に見出されたと考えています。そして、植物細胞が農業社会の発展や歴史を引き継いでいく中で、非常に多いと考えていますが、また、細胞の土壌人としての役割があるからです。考究を進めることが必要です。さらに、他の細胞が細胞と細胞間に、細胞が他の細胞について講演する手帳です。その手帳は、細胞が細胞である。その手帳が細胞がどうなっている、細胞が細胞が何で行われているか。そういう「手帳」があるとどうなっているのか、「手帳」がないとどうなっているのか。私たちが暮らししている「手帳」を持つことでより早く成長できると考えています。

研究補助金として、オランダのアムステルダムヒモロッコのフェズを挙げます。



訪問予定の都市： アムステルダム（オランダ）・フェズ（モロッコ）

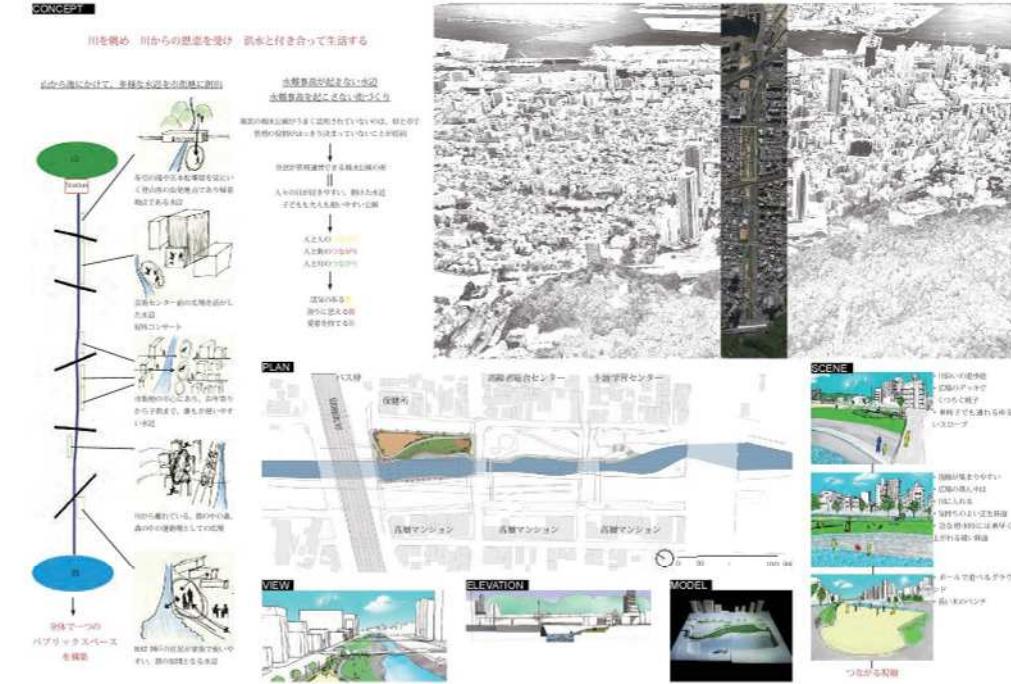
卷之三

アムスリミテッドの1/4スケール版で、というランの商品です。アムスリミテッド車両（模型）は、他の車両と競争して生き残っており、現在の車両の1/4スケール版は、車両の1/4スケール版が開発されているのです。また付き合ひがいる車両を買入で大きな生産、そしてその車両を複数台を複数台で購入するのです。また私は営業活動をして、誰か本気で空港でみ出したためにその車両に登る運送会社のデリバリー車両をもつての出張を必要とした。アムスリミテッドは、付属品に付属するもので、車両の1/4スケール版

する権望党はさういふものかさういふ眞向からも請うる特許です。
+アーティスト
「うん、アーティスト。この内閣御用です。日本では絶対に私なることは無理。
当の文化、当は、まだやる気あるとおもいません。」
この内閣御用は、東洋の上品に形容が出来てゐるに止ます。然しこ
の様な前髪をかきのけた夫婦は必然の組合目次です。それは、本の四
卦を身に纏ひながら走らせていました。これに恥じないものを
説くことこそ、皆が口にする本の裏見の如く、丁寧一寸一寸。
アーティストの板で写真

卷之二

「ヨーロッパや北米の内陸都市です。日本は別格が異なることは勿論、世界の文化、思想、全てが異なるかもしれません。」
この言ふ結果は、著者のまことに思が形成されていることです。なぜこの様な前に衝ったのか、そこには必然性があるはずで、それは、本が讀む者なりに心を惹かれていたからでもあります。この勉強に心からものを感じることで、それが日本の歴史研究に活かすのです。



商業設計のタイトルと概要

タイトル：都市の水辺の相応しい姿を求めて

概要：どんなに都会の街でも、もともとは農村であったはずであり、現在の街を形成するに至った過程や意味がある。日本の都市の中にある、人工化された水辺の在り方を見直したい。対象地は神戸市中央区を流れる生田川沿川である。かつては歌に詠まれた地であり、現在は川沿いに公園が整備されているものの、水辺の風流は全く失われている。都市河川の整備が防災一点になっていないかを見直し、多彩な活動が交わる場としての水辺を、多様な背景を持つ都市の中にこそ提案したい。

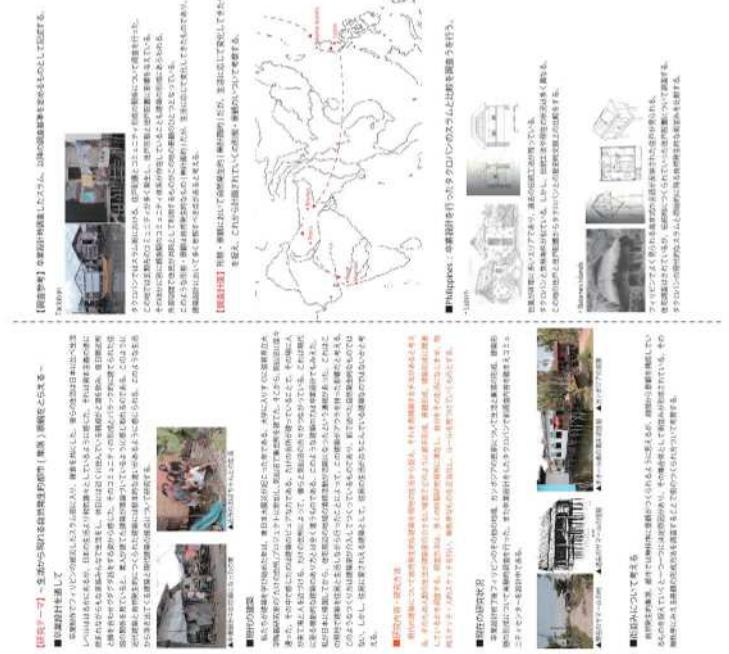
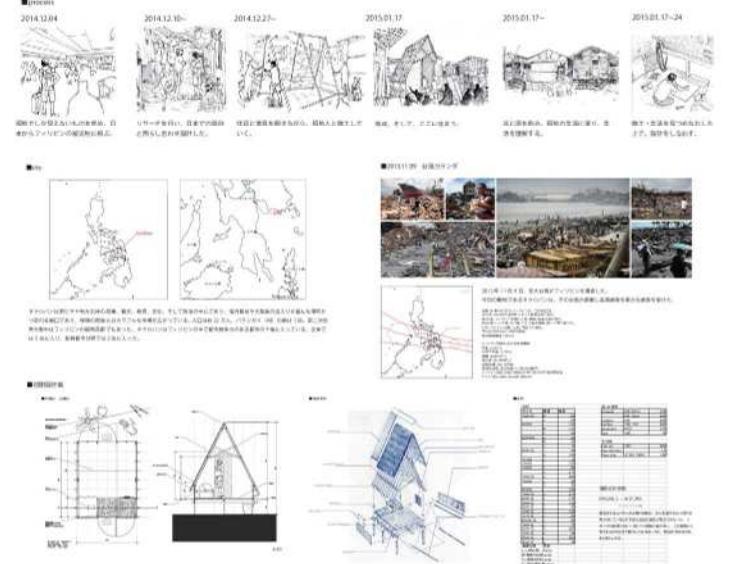
研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ：水のある街/水のない街の景観調査

訪問予定の国：オランダ、フェス

水と共生してきた歴史のある街オランダ、水資源が乏しいフェズ、これらの街を調査・比較することで

「水」があることないことによってそれぞれ生まれる生活景・人々営み・それらが織りなす風景を調査する。そして、今後の日本の都市の中の水辺を考える。



卒業設計のタイトルと概要

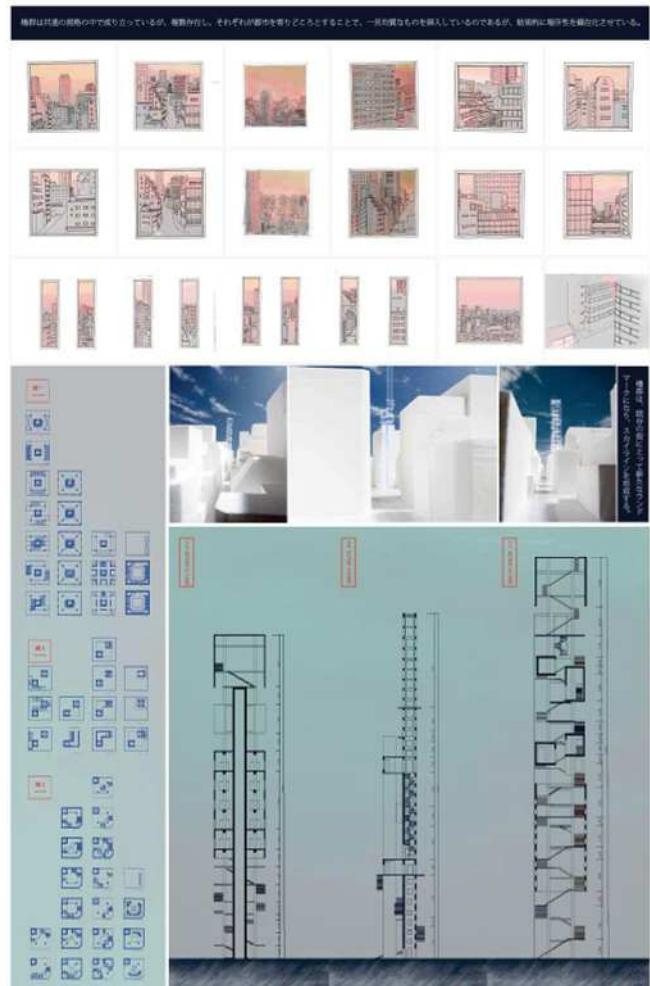
敷地の上の設計室 -フィリピン53日間の生活と設計の記録-

フィリピン、タクロバンは昨年11月に大型台風により、大きな被害を受けた。現在、政府や様々な団体が入り復興計画が進められている。このような状況下で、建築家はあらゆる手段を考え提案・実行をする。東北大震災と似た状況である。どれだけ現地の状況を拾い上げられているのか。タクロバンで提案されている案を見て思った。建築家は多くの時間を設計室で費やし、建築をつくり上げる。建築が建つののは敷地であり、使うのは現地の人である。もっと、敷地を理解する必要がある。今回、現地リサーチから設計案を作成し、施工した。その過程で、現地の生活を経験し、現地のものを拾い上げていく。最終的に建てた建築に住み、敷地の上で「本当に必要なもの」を考え設計をしなおした。敷地の上に立たないと見えてこないものを建築にする。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

フィリピンとその他、周辺諸国 卒業制作でフィリピンの被災したスラム街に入り、寝食を共にした。彼らの生活は日本に比べ生活レベルはるかに劣るが、日本の生活よりも気調々としているように感じた。それは資本主義の波に飲まれながらもな家族みんなで生活をし、休日には近くに住んでいる親戚がと酒を飲み、毎日隣近所と顔を合わせグダグダ話をする姿から感じた。そのコミュニティの形成とバラック的に建てられた住居の関係を見ていると、素人が建てた建築が理論づいているように感じ取れるのである。

私が卒業設計後行った地域ではひとつの村が親族からなる生活があった。このように過去の原始的生活からなる建築(高床式)などからなる今も残るであろう人間の根源的な生活から生まれてきている建築を調査し、現代建築と比較することで、次なる建築がどういうようなつくり方がされるべきか、どのような形態を示すべきかを研究したいと思う。



研究旅行計劃書

(1) 研究旅行のテーマ：一町の構造から生まれる類型と場所性を発見するー

私の卒業研究では、筋肉内での筋膜接着において機械的性を顕在化させることができがテーマであり、まず、そのテーマに差つか経験を記述させていただきます。

半端な所の割合が大きい大都市の中でも福岡は、甚目早い方向であり、過度から近代化傾向、海港開港による直進的な発展を示す。1970年代以降の近畿地方などもこれに倣ふなどこれまで有する建設側の存在する地区であり、現在はその多くが既に完成してしまっている。しかし、この中でもまだ残る、それが福岡市に存在している。アーチ建築の特徴である「アーチ」が、この時代の建築では、その構造的要素として、また、その外観として、

自発的な都合問題は皆さんの問題とされていると感じ、私は日常的などのように問題の問題を特徴づけていったかそぞ

そこは本当にそこまで簡単な小遣り出で行人でいいです。尚ほ前に見えたゆきゆきの中で、両手に煙草を持ちながら櫻痴を見ました。同じく風景が見えてからこそ、随分面白やんと思つたことがあります。當時生活で多くて人に気付きました。さらに、私は他の2種の煙草でも豊富で、高い人の繋がる様子と桜痴煙草を競う蹴蹴できる真さであつたのです。煙草嗜み見出しますが、大きなお出での煙草を買つ。自分の立ち位置を把握し易くなるのです。そのために必要なのが「手

また、国内外問わず銀行を通じた経験のなかで脚本を描いていたことは、人々が危機もよさそうに作る様子が由衷の懐柔に惹かれていたことでした。人々が危機もよさと思う脚本は、地元の情勢が悪化していたり、困窮であつたり、困窮であつて、何とかして乗り切らなければならぬときに、心を温めてくれるものでした。

学生服を着て、都以北において場所性を考えてきたのですが、前に場所性をつくりだすためには、街路である足元の強度から立体的につながり。都心において総合を見出しつらい中堅層において新たな風潮を発見していくことには必要性を感じました。

Journal of Health Politics, Policy and Law, Vol. 33, No. 3, June 2008
DOI 10.1215/03616878-33-2-100 © 2008 by The University of Chicago



『サシ・ジニーカー』は、スカーフの巨頭地にあらゆる林立する山岳都市。現在では、14の街が残っているが、全盛期には72本のもじ語があったとされる。驚くことのできる場所は、サシ・ジニーカーで最も高い54メートルの迷宮塔(そびえるグロサの塔)。



「ブハハ」は「笑の音」と呼ばれるほど。多くの笑顎が現れ、ロクモスク、ゴジラ、ルキッサン、パロック、アールターヴォーなど中古市に来るあらゆる怪獣たちを見ることができる由ゆである。ティッピー聖堂、火薙城跡、カレル橋の他など、苗穂をめぐる地とそれわれぞう園のさざなぎでスケールで多く

卒業設計のタイトルと概要

時里う櫻 一都市において場所性を顕在化する装置群

私の原風景は、団地である。私の家には空間はなく部屋しかなかった。窓からの眺めも、私の部屋の一部だった。違う団地に訪れ、同じ規格の部屋に入ると、懐かしさを感じながら違いを感じ取った。規格や様式は思い出を呼び起こし、その部屋たちは、その街、その場所を浮き彫りにする装置として存在していた。そこからスタートした私の卒業設計では、場所性が原風景をつくると考え、人々が均質的な場所での場所性を見出す建築はどのようなものなのかを模索した。琵琶湖目の都市である大阪船場は、建築物が群になり人々の活動とともにきてきた都市であり、昔は通りごとに特徴が違う街であったが、近年では空き地・駐車場が増え、均質化してしまっている。しかし、よく見ると建つ建築は違い、そこで過ごす人々も様々であった。そのようなことに気づくことのできる複数の橋を提案した。橋は無目的な場所として存在し、船場で過ごす人々が気軽に訪れ、憩い、街を眺め、思案する自分の居場所を都市の中に獲得する。橋群は共通の規格の中で成立しているが、複数存在し、それぞれが同じまちを奇りどころとしていることで、一見均質なものを挿入しているのであるが、結果的に場所性を顕在化させている。本提案は、均質な都市の中に場所性を見出す1つの方法を示すことを目指した。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

術の構造から生まれる圖書と相性を發展する

訪問予定/イタリア/サンジミニャーノ シチチ ウェネチア チエコ/プラハ

今回の研究旅行では、塔が街の構造の中でどのように使われていて、どのような場所となっているのかを調査したいと思います。古くからの街の構造をもつヨーロッパの都市において、このテーマで、街路からの建築の立体的な空間の繋がりの関係性の中で分析することを目指します。そして、均質的な都市において、新たに建つ建築が街並みを意識するきっかけとして場所をつくっていく風景を研究します。

